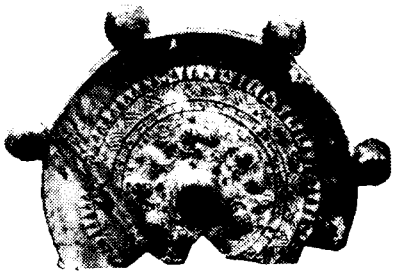
第 43 号　　平成30年 6 月 8 日

文化財やまと

大和町文化財保護協会発行

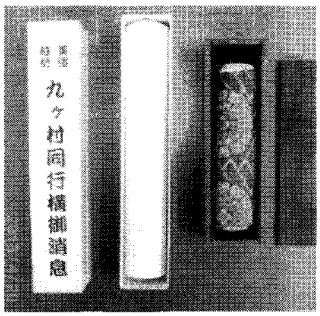


七鈴五獣鏡

「九ヶ村同行」

会長　齋藤武生

毎年一月十四日、西本願寺の御正忌報恩講のおり、九ヶ村（美濃神路・大間見・為真の三ヶ村、越前穴馬地区、荷暮・下半原・大谷・久保・下伊勢・上秋生の六ヶ村）の小さな村の門徒が京都本山の西本願寺で導師（御頭人）として勤行が出来るのか、このことについては、「文化財やまと」の第三十七号に九ヶ村同行の「御頭人」として寄稿しましたが、今一度、九ヶ村同行について、記します。



左　御消息書
右　調査報告書

一、石山法難調査報告

昨年の三月に、白鳥町の池田氏（九ヶ村同行員）が仏壇のお磨きをしていたところ引き出しの中から桐の箱に収められた、巻物一巻が出てきた。

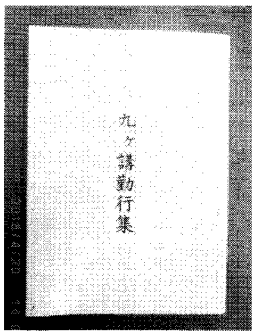
「石山法難調査報告書」との表題で九ヶ村同行「御頭人」の由来に関する調査結果が書かれていた。（写真右参照）

その報告書には、

昭和十六年四月九日
神　路　西念寺住職歳藤了智
大間見　小野木喜助
為　真　溝添儀助
右　同　池田全明

の四名が、京都市下京区の遍照寺（西本願寺前に位置し代々御頭人のお取次ぎをしている）住職花山秀真から聴取した報告書であった。

それは、功労者の史実として、「文献無キタメ口傳ヨヲ記ス」とあり、御頭人が出来るのは「毎年親鸞聖人の本山御正忌報恩講のとき、在家のまま御頭人のとして勤行を勤める栄誉は石山合戦の際、顕如聖人（西本願寺第十一代門主）が織田信長と和睦して紀州（和歌山県）鷺の森に退去の折、糧道を絶たれ困難の時、美濃越前九ヶ村同行が、真綿、糧米を運び、その危急をお救いした。顕如聖人は深くその意を喜ばれ、「兆時御相伴」を申しつけられたことからである」旨が記されている。



御当人勤行集

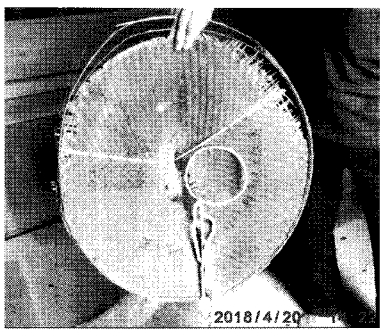
二、御絵像の下附

蓮如上人御絵像が顕如上人から天正九年（一五七九年）九ヶ村同行に下附されている。この御絵像の裏書きには、「専修寺門徒美濃郡上郡　越前大野郡」と記されている。

このことから、その名誉が長く称えられ、御頭人として特別の待遇が与えられたことが推察される。

この御絵像は、九ヶ村同行間で一ヶ月から二ヶ月間隔で持ち回り観経されている。

持ち回りに当たっては、御絵像を持っていくものは、必ず、笠を被り簑を着用したという。笠の裏には、「蓮如上人御糧九ヶ同行御巡回御用笠」との記入がある。



笠簑の写真

御本山の、一大事と野良着のままま駆けつけた名残りであると言われている。

（笠・簑写真参照）

七鈴五獣鏡とは

岐阜県指定重要文化財であり六世紀中頃（約一五〇〇年前）のもの

管理者　徳永多賀神社

鏡は、写真のように、全体の四分の一が欠損している。白銅製で、鏡面は光沢のある灰色を呈しており、文様のある面は外から鋸刃文帯、連続三角形文帯、偽銘帯があり、その内側に小さな五つに乳と形状不明な五獣を拝している。

直径一一・四㌢、周囲に七つの鈴があったが、そのうち三個が欠けている。鈴子は小石で、振るとかすかな音を立てる。

笠・簑は現在大間見の円光寺で保管されている。

三、九ヶ村同行は専修寺門徒

専修寺は、福井市花堂にあり、三河の僧如道師が開基である。如道師は郡上から越前穴馬郷を経て、教線を広げた。この大野専修寺は、蓮如上人北国御下降（福井県吉崎）に際し数十ヶ寺（西念寺等）の寺とともに、本願寺に帰参した。

専修寺は、この九ヶ村同行のみ直接門徒としている。その後、専修寺は、信長の討伐を受けて、門徒は京都興正寺に移され、専修寺は福井県三国町で寺号も勝授寺と改め現在に至っている。

勝授寺保管の書上には、九ヶ村同行の門徒の部落名、住民の名前が残されている。

四、門主の巡業と消息

本願寺の門主が、一地域の末寺、道場へ巡行するのには、それなりの特別な理由が必要であり、この巡行が過去二回も行われている。

●年代は不詳ですが、二十一代門主明如上人（一八五〇～一九〇三）が越前穴馬へ巡行をしている。（石山法難調査報告書には、油阪の急坂を改修した旨の記述がある。）

●昭和三十一年三月一日には二十三代門主、勝如上人（一九一一～二〇〇二）が西念寺へ巡行され、「美濃越前九ヶ村同行講御消息」（本願寺門主からのお手紙）が授与されている。（写真左参照）

五、まとめ

毎年西本願寺での御頭人の勧行は長い歴史の中で繰り返されている。

私は父から、西本願寺国宝の鴻の間の上座で一般の参拝者とは別に、門主と一緒にお斎を頂いていた。

昭和二十四年までは、門主と十五分間火鉢を囲んで話ができた。

お斎の前には、本願寺への御進納の読み上げがあり、九ヶ村同行は、一番初めに読み上げられた。

と、聞いている。

このように、西本願寺は、九ヶ村同行に対し、大変な厚意をつくしていることが、この調査で知ることができた。

今後とも歴史の事実として、この御頭人が続くことを願うものである。

大和町文化財保護協会総会　記念講演

講師　長滝神社宮司
岐阜県博物館協会会長　若宮多門氏

演題「白山開山千三百年―その宝物が教えてくれるもの」

（長時間に渡る、講演につき、編集委員で、要点のみを記しました。ご了承ください。）

記念講演の様子

（はじめに）

白山は、我々が自然の一員であることを教えてくれます。開山千三百年を機に、多くの人が、白山の信仰、白山の文化を見直して頂きたい。これまで、合理性、人間中心できたが、大災害続く中で、自然の驚異や有り難さというものがみえてきた。いまこそ、白山という御山がお役に立てる時に来ている。

「姫神」というシンセサイザー奏者と、平泉・毛越寺の延年の舞との競演を千三百年記念にやろうということになり、先日、岩手県まで、打ち合わせに行ってきた。飛行機に乗ったすぐ、左手前方に真っ白な山が登場し、ほとんどの乗客が、「ほー」という声を挙げた。濃尾平野の人たちは、田植えや田圃の世話をしているときに、白山という山が「みくまり」＝水を分け与える山ということで、その恩恵にあずかってきた。

■延年が結ぶ縁

さて、何故岩手県に行ったか、それは、中尊寺と毛越寺をおじゃまするため。姫神のコンサートで、毛越寺の延年が一緒に行われるからです。延年というのは、日本古い形態の芸能。能とか、その後の歌舞伎に大いに影響を与えた芸能である。長瀧の歴史的な背景を調べると、おそらく千年は続いているのではないかと思う。同じく平泉の中尊寺に二演目、毛越寺には八演目くらいが残っている。そういう延年のつながりでおじゃまをさせて頂いた。毛越寺の「老女の舞」というのに出てもらう。この老女、毛越寺の住職が来て自ら役者をされる。問題は中尊寺。中尊寺様に御願いに行ってきた。郡上市の一番の金銅蔵と言えば、石徹白の虚空蔵菩薩像が浮かぶが、あの仏像は、観音堂という所に納められていて、昔、京都の仏像の研究者の働きなどで、中尊寺とつながりがあることが分かった。中尊寺にそれを見て頂いて、そして揮毫をして貰おうと訪ねて行かれた方がある。仏像研究者の井上先生という方が、平安末期の仏像であろう、これは、藤原秀衡公が寄進された仏像に違いないということになった。中尊寺の方々が過去の歴史を紐解かれると、白山山麓一帯に、色々な手当を藤原一族はしてきた。よく考えてみれば、自分の所の守り神は、白山である。

中尊寺・金色堂の奥に能楽堂がある。その能楽堂は、実は、白山神社である。白山神社の付属能楽堂だから、その一角は、

中尊寺ではなく白山神社である。北の守りに白山神、南は崇敬に日吉の神。自覚大師が平安時代初期に、関東から、東北へ、天台仏教を広める旅の時に、二人の神を常に携えて行った。中尊寺はその時代そのままに守り続けて、守り神を白山神社とした。直線距離にしたら、七百五十キロも離れており、ビックリする。（岐阜の山奥に）そんなすばらしい仏像があるのか、何でそんなところへ行ったのか、よくよく自分達の地域の歴史を調べたら、白山神の加護のもと、平泉文化が守られてきたことが分かってきた。

一九八五年頃、虚空蔵菩薩の修復事業で、石徹白の地から京都へ出て、あの時代の研究者がみんな目を通していて、是は間違いがないだろうという完全なお墨付きを頂いた。そして、「藤原秀衡没後八百年祭」が平泉で行われる際、「里帰り仏」ということで、すばらしい仏像と並べて、中尊寺で陳列された。

私が三十ちょっと出たころ、白鳥の成人講座の仲間と、平泉にも延年の舞があって、何か必ず、つながりがあるに違いないから調査研究して来ようと平泉に行った。その年、姫神というシンセサイザー奏者が毛越寺の庭園で演奏をしているフィルムをみせて頂き、その後、姫神自身と、そのプロデュースをされた方と交流ができ、その二年後に第一回目の姫神のコンサートが実現した。以後、四年ごとに三回行ったが、姫神さんが亡くなってしまい、途絶えていた。十年ほど前から、姫神のご子息が音楽活動を始められて、長瀧へもお越しになり、石川県の白山比咩神社や越前馬場の勝山平泉寺へも行かれる、ということで、この十年間、毎年のようにこの三ヵ所にお参り頂いている。そんなご縁もあって、この郡上市でも白山開山千三百年の事業として取り組むことになった。これは、郡上市の話だけでなく、白山市においても、勝山市においても、色々な計画がある。

■白山が持つ情報網

コンサートの企画は元を正せば、虚空蔵菩薩から始まった。あの仏像からわれわれは、色々なことを学んでいる。実体のある今日の地域文化、宗教文化を発信する、こういったイベントを行うという発想につながっている。郡上市が持っている文学的な素養の大元には東家があって、今日の郡上八幡という街がある。今日の郡上の素地を作ったのは、北からの文化。それが白山の文化であり、東家の文化であり、それが混ざり合って出来たのが、郡上八幡という町。それを裏付けるものが各所で伝わる宝物や文化財をひもとくことである。何故、秀衡は、白山を大事にしてきたのか、わざわざ遠く白山山麓の遙か彼方まで、いろんなものを寄進して、保護したりしているのかと言うと、白山山伏達が力を持っていたからと言える。

白山の一つの働きにランドマーク、山だめ、山あてというのだが、海を通る人達にとっての目標ということがある。白山の姿が見えてくれば、そこに、日本があるということが分かる。白山の方向がどこにあるかで、自分達がどの辺にいるかが分かる。最後の命の綱、ランドマークですから、地図には、やまだめ地図とか、山あて地図というのがあって、山の絵を描いた地図を漁民が持っていた。新潟県の人たちは、船の中に白山妙理大権現のお軸を掛けて、各船が祀っていた。ですから、白山神社の数は意外に多い。新潟県は石川県よりも多い、その次に多いのは愛知県で、二百二十社ある。加賀の石川県は、二百社に満たない。全国に白山神社は広がっていて、特に、東海、東北地方・いわば東日本全体にある。勿論、四国にも九州にもあるが、数は圧倒的に東日本に広がっている。昔の山伏・修験者達は回峰行をしてまわる。それから、寄進を集めて回る。勧進ですね。山伏は、表街道も、山中にも、裏道にも非常に詳しい。沢山の白山神社が点在しているので、その間のネットワークが沢山出来上がっている。山伏達は、今日で言う情報網である。その当時、最も健脚で脚が早かったのは、山伏であろう。物を運ぶ、情報を伝える能力も山伏。遠く平泉の地にあっても、沢山の山伏を大切にしていれば、沢山の情報が入ってくるということである。

昨年の大河ドラマは真田丸だったが、真田昌幸は毎回のように自分の家来や子ども達を集めて、謀略ばかりやっていた。後には床の間があり、掛かっているお軸は白山大権現だった。諏訪の地だったら、諏訪明神か、或いは、地元の八幡神かそういうお軸でもいいのに、白山大権現が掛かっている。第一回から第十二回までずっとそのシーンが登場する。それは、今言ったように、他国を攻めるのにも、情報網を持っていないと無理だった。その地の地理に詳しい者でないと分からない。斥候役とかスパイ役を山伏達が全部していた。各時代各時代の武士達は、山伏達を、宗教勢力を大事にしてきた。特に白山の場合は、全国からいろんな行者が集まる。又全国へと、行者達が出ていく。白山山麓一帯の白山社は、神仏習合で、習合している基寺は天台宗である。比叡山延暦寺と太いパイプを持っている。というのは、京都の情報は入ってくるから、白山麓を大事にし、白山の山伏達さえ大事にしていれば、情報網はきっちり揃う。

■文化財が持つ意味

信長は合理主義者で、神仏を敬わないといわれてきたが、実は、白山信仰の人。長瀧には、信長が使っていたとされるお膳とお椀が有る。それに軍配も。長瀧には修行僧や山伏達の出入りが頻繁にあった。信長が力をつけてくると、長瀧の坊さん方は相談して、今まで長瀧の持っていた既得権を認めて貰うために、道雅というお坊さんが、岐

阜城へ出かけて、信長に謁見して、今まで通りの既得権を認めて貰った。その時に、信長からお土産として、お膳とお椀を貰ってきた。軍配は、それは、白山の神に戦のことを任せるよという意味。同じ意味合いで、食器を寄進したと考える。こういったことから、信長は、白山信仰の人であることは間違いない。

こうしたものの、一つ一つが、長瀧のお宮に残されているが、大和の町から出てきたもの、発掘されたもの、残された記録の中から、ただそれを比べるのではなく、その背景にある、もの、そのものが語ることをきちっと、検証したり想像を豊にしたりする為にも、そのものを保全して、保管して、大事にしていかないと、そういうものを可能ならしめないと思うので、文化財の保護ということは、大事なこと。その時は分からなくても、色んな所から他の資料が上がって「あ。そうか。大和にあるこれは、こういう意味か。」ということが、見えてきたりする。是非とも古いものがあったら、とっておいた方がいい、場合によっては、何でもとっておいた方が、いいかもしれない。

ちょっと変わったもの、古くからあそこの家にあるもの、私達にいろんなことを教えてくれるものがあるのではないかということを、象徴的に、コンサートとひっつけて、今日はお話しさせて頂いた。

一つの文物に、面白い物語が、いっぱい潜んでおり、これからの人たちにも、理解して頂くためにも、われわれが、守り伝えていくことが大切でないかと思います。（以上）

～春季日帰り旅行～
『古都京都の文化財を訪ねて』

金子　徳彦

昨年の総会では千葉氏研究家の鈴木佐氏を招いて講演をいただいたり、夏には、千葉市で初めて開催された「千葉氏サミット」に参加したりするなど、東氏の源流に迫る一年だったこともあり、今年の春の研修は東氏ゆかりの建仁寺と決めていただきました。

■近江・三上山

四月六日早朝、あいにくの雨模様との天気予報で、皆傘を持参の旅です。二十六人を乗せたマイクロバスは、一路名神高速道路を西に進み、多賀サービスエリアで一休みすると、そろそろ滋賀県野洲市に近づいたので、このあたりから勉強会が始まりました。近江三上は、言うまでもなく郡上から転封された遠藤氏の領地です。近江富士とも称される美しい形をした三上山が見えてきました。三上山には国宝の本殿をもつ御上神社のみならず、遠藤氏によって妙見堂が勧請されていたことなどが紹介されました。また、この山を七巻半した大ムカデを退治したという俵藤太（藤原秀郷）の伝説でも有名で、改めて読み上げて確認したことでした。

■祇園

いよいよ京都に入ると、京の都は花盛りです。満開少し手前の七分咲きというところでしょうか。花期が短い桜には、なかなかタイミングよく行き会わせるということはありませんが、今回は幸運に恵まれたようです。目的地の建仁寺は繁華街近くでバスが入れず、八坂神社前で降りて、歩いて行くことになりました。四条通りから花見小路へと曲がるその角は、あの忠臣蔵の大石内蔵助が昼行燈よろしく遊び呆けたという一力茶屋。花街祇園の風情が匂い立ってきます。それにしても、この花見小路界隈のべんがら壁のなんとも艶っぽいことか。我が家の柱もべんがら塗なのにねえ…。舞妓さんの都踊りが披露される歌舞練場前を通り過ぎると、そこにお目当ての建仁寺がありました。歌舞練場も当初は、建仁寺の塔頭が使われていたのだそうです。

■龍山徳見

さて、建仁寺です。建仁寺は建仁二年（一二〇二年）、源頼家が栄西禅師を開山として建てました。つまり、建仁という寺名は元号によっています。京都最古の禅寺と言われます。室町時代に五山制度が取り入れられると、その第三位として厚い保護を受けて栄えました。栄西は、昔は「えいさい」と読んでいましたが、近年はたいてい「ようさい」と言っています。栄西は『喫茶養生記』を著して日本にお茶を広めた茶祖としても有名です。建仁寺の境内には立派な茶碑が建ち、平成の茶苑も作られていました。

この建仁寺にある霊源院と両足院という二つの塔頭は、いづれも龍山徳見という東氏ゆかりの僧が開山であることから、ここを訪ねるのが今回の研修の大きな目的です。龍山徳見は郡上にきた東氏ではなく千葉に残った東氏の系統とされています。東氏の初代・胤頼の次男で、木内荘を領した木内氏の流れをくむ人物と考えられているのです。そのような縁もあってのことでしょうか。東常縁の周辺には建仁寺や南禅寺などで活躍した五山僧が綺羅星のごとく登場しています（左頁記系図参照）。

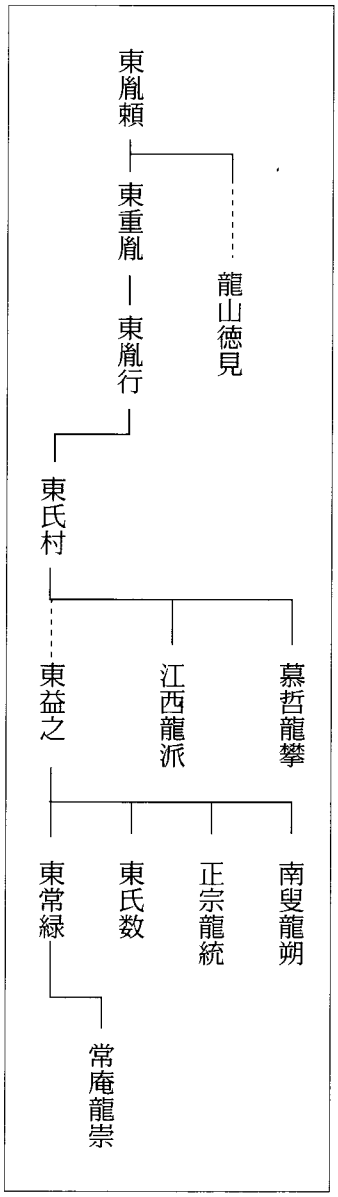
龍山徳見は中国（元）に渡り、修行と遍歴四十年、官寺の住職に就任するという出世を果たして日本に帰ってきました。この時龍山徳見を慕って同行してきたのが林浄因で、同時に日本に饅頭をもたらしたとされます。宗祇から古今伝授を受けた奈良の連歌師・林宗二（饅頭屋宗二）は七代目になります。今も和菓子の老舗として、名高い東京の「塩瀬」は、その末裔ということです。

■両足院

建仁寺に着いた一行は、まず

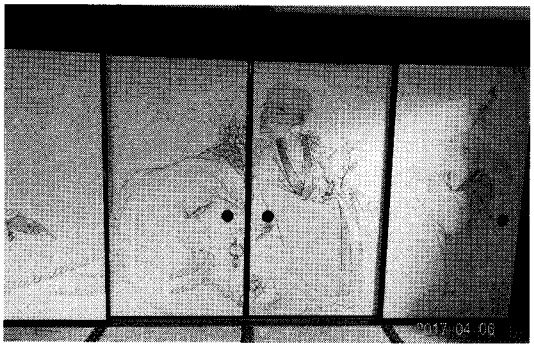
両足院を訪ねました。両足院は通常は非公開のお寺ですが、今回は我々のために開けていただきました。副住職の伊藤東凌さんにご案内をお願いしていたのですが、東凌さんは、体調不良で声が出なくなってしまったとのこと。急きょ、住職がご案内をくださいました。住職の方が良さそうなものですが、どうも今一、声が通らないやら、我々を郡上だと言っているのに千葉からの一行だと勘違いされるやらで、要領を得ないことでした。なにやら、開山の龍山徳見がらみで、饅頭を日本にもたらした林浄因のことをえらく強調されているように感じました。そのような俗な話題の方が一般には受けがいいのかなと感じたことでした。

両足院庭園



両足院では現在方丈の襖全九十二面の襖絵製作が進んでいるとのこと。以前に雑誌で紹介された資料によると、描いているのは千七百年の歴史を誇る中国の天童禅寺より「天童第一座」を授かった七類堂天谿氏。かつて第一座を授かった日本人は、栄西と雪舟のみとのこと。襖絵は建っている八面を観ることができました。月星紋の把手が付いた襖には栄西や龍山徳見、徳見についてきた林浄因が饅頭を持っている姿なども創作されていました。

両足院には、国宝「瓢鮎図」で有名な如拙筆に正宗龍統が賛を書いている三教図（重要文化財）や長谷川等伯の「竹林七賢図屏風」、伊藤若冲の「雪梅雄鶏図」などのお宝があったのですが、残念ながら今回は御目文字かないませんでした。


両足院　襖絵

方丈の廊下から眺める庭園は見事でした。枯山水庭園と鶴が羽を広げたような形の池を据えた池泉回遊式庭園。中には「水月亭」と「臨池亭」という二つの茶室が並びます。二月下旬から夏にかけては、書院前庭の池畔の半夏生が白く化粧をし「半夏生の寺」と呼ばれる美しい庭へと変化するのだそうです。

■建仁寺本坊

続いて、霊源院を参観する予定だったのですが、手違いで時間がなくなったため、建仁寺本坊を拝観することにしました。ここには有名な俵屋宗達の「風神雷神図屏風」（国宝）や海北友松の「雲龍図」、「竹林七賢図」など楽しみな絵画が多くあります。現物は非公開ですが、高精細デジタル複製によってあるべきところに収まっているので、本物が目の前にあるのと何ら変わりはありません。法堂の天井には巨大な双龍図がありますが、これは平成十四年に創建八百年を記念して小泉淳作画伯が描かれたものとのこと。

方丈の襖にも現代の型染め作家・鳥羽美花氏によって鮮やかな図柄が描かれていたり、あのダウン症の書家・金澤翔子さんの風神雷神が宗達の隣に展示してあったりとか、建仁寺というところは、伝統の中に現代美術を大胆に取り入れる進取の気風に満ちた寺だということを強く感じたことでした。

■清水寺

建仁寺を後にしてから、昼食を挟み、清水寺を訪れました。清水寺は五十年ぶりの檜皮葺屋根の葺き替え工事が始まっていて、丸太の足場が立ち並んでいました。景観的な配慮があって丸太になったのでしょうか。それはそれで見事なものでした。工事完了までに三年ほどかかるそうです。それにしても京都の外国人の多さにはびっくりです。建仁寺でも中国人らしい何組かのカップルが和服姿で結婚式の前撮りをしているのを見かけましたが、ここ清水さんでは右も左も外国人ばかり。日本語を聞くとホッとするような有様です。京都を訪ねる外国人は、一昨年の統計で年間五千六百万

建仁寺本坊

人余り。その内約半数が清水寺周辺に来ているとのこと。国別では、台湾、中国、アメリカ、オーストラリアの順。まざまざと見せつけられました。

雨模様とのことでしたが、何とか京都を離れるまでもってくれました。

秋季日帰り研修
女城主井伊直虎ゆかりの地
浜松の文化財を訪ねて

遠藤高真

秋の日帰り研修は、十一月九日参加者二十七名の満席で大和を出発し、静岡県浜松市の竜ケ岩洞、おんな城主直虎大河ドラマ館の見学、龍潭寺の拝観をしました。

竜ヶ岩洞の入り口

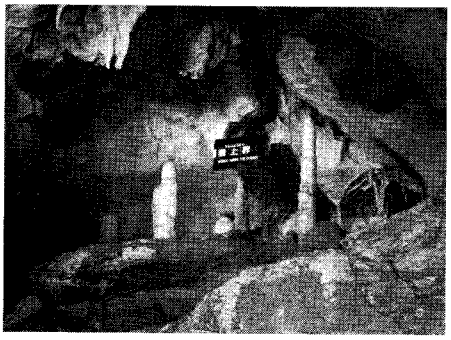
◆竜ケ岩洞◆

今回の研修地は、NHK大河ドラマ「直虎」で、知名度が上がっている、静岡県浜松の井伊谷(いのや)でした。最初に、訪れたのは、東海地方最大級と言われる鍾乳洞の竜ヶ岩洞です。

入り口前の広場で、記念写真を撮りました。入り口左手にはガラスのスペースがあって中のコウモリが私たちを迎えてくれました。

奥に向かって進むと、点々と様々な鍾乳石がライトアップされていたが、目を見張るようなものは無いようにに感じました。

さらに奥へ進むと、突然ザーッと、大木な水音が聞こえました。ここが見所の落差三十メートルの大滝です。なかなかの水量だし、空間も広い、残念だったのは、水避けの屋根があるため、上を望むことができないことでした。五十ヵ所の見学ポイントを眺めた後、洞の外に出ました。平日のためか、観光客は少ないようでした。


竜ヶ岩洞の内部

◆浜名湖レイクサイドプラザでの昼食◆

さあ、次はお楽しみの昼食です。会場のホテルで、案内された部屋には、豪華な「籠盛御膳」が並べられていました中々のボリューム。ビールと一緒に美味しくいただきました。満腹でした。

◆おんな城主直虎
大河ドラマ館◆

次はいよいよ井伊谷です。特設駐車場には、観光バスが二十台近く停まっています。バスを降りて進むと、大河ドラマのロケに使われた気賀の関所が移設されていました。番所や牢屋敷もあります。それを両側に見ながら進むと、浜松市文化センターホール。ここが、大河ドラマ館です。館内は、かなりの人でした。

壁には、「直虎」に登場する人物の写真パネル。床には、撮影に使われた着物や小道具が展示してあります。映像も公開されているが、少し物足りない感じでした。

◆車中での
ボランティアさんのガイド◆

ドラマ館を出た所で、現地のガイドの女性に同乗してもらい、これからむかう龍潭寺の案内をしていただきました。直虎と書かれたピンクの法被を着たガイドさんが一言。

「この直虎のドラマ館、ちょっとがっかりなんです。」

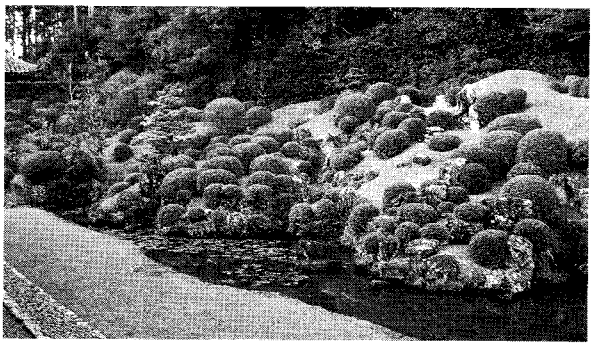
車内に、どっと笑い声が広がった。車中、この辺りには、井伊谷城跡や井伊家墓所など、ゆかりの史跡がたくさんあると話されました。

◆龍潭(りょうたん)寺
・・・思わぬサプライズが◆

やがて、バスは寺の駐車場に着きました。ガイドさんに促されて山門を潜って石段を数段上がると、目の前に大きな龍潭寺の本堂が現れました。この寺は奈良時代に創建と伝わる臨済宗の寺で、井伊家の菩提寺です。大河ドラマの中でも、俳優の小林薫が南渓和尚を演じています。傍らの木立の中で、井伊家歴代の墓の説明を受けながら進んでいると、突然、

「ちょっと待ってください。」

との声。次の瞬間、並んでいたご婦人方がざわつき出しました。…何と、大河ドラマに小野政次役で出演している高橋一生が、写真撮影を終えて現れたの


小堀遠州作　龍潭寺庭園

です。居合わせた私たちに握手して立ち去ったそのイケメンは、テレビで見るより小柄な印象でした。思わぬサプライズに、皆興奮気味でした。

本堂に入ると、そこには高橋氏の姿が。堂内には、襖絵や屏風絵など、文化財がたくさんあります。しかし、私は彼の動きばかり追っていました。最後に、国指定名勝の庭園を鑑賞して、山門を出ました。

◆終わりに◆

そして、門前の県道を渡って向かったのは、井伊家元祖共保公出生の井です。それは、寺から三分程の田んぼの中に、漆喰の塀に囲まれてありました。井戸の中を覗くと、三メートル下に砂利が敷かれたくさんの硬貨が投げ込まれています。傍らには、橘（たちばな）の木が植えられていました。

ガイドさんと別れ、帰路に就いた私たちを、浜名湖を染める夕日が見送ってくれていました。

「直虎」が終わったら・・・と、来年の井伊谷を思いながら、大河ドラマの影響力に、今更ながら感心させられていました。

文芸欄

短歌

早春の山里

大井　正明

降りしきる　雪に消されて除雪機のライトの光せわしく動く

初釣りのあまごの紅（あか）き斑点は　跳ね上がるごと雪上に映ゆ

大根の値下がりを待つ老いの鍋　今宵のおでん大根はなし

誓願（せいがん）となりて田面を渡り来る鐘は　永代の長徳寺

白山心のよりどころ

山内　敏子

純白の雲海に浮かぶいただきの　夕日に映えて思わず合掌

姑を連れ寄りそいてゆく白水湖　通い始めて五十年続く

白山の開山行事長瀧寺　亡き姑しのび参拝をなす

こくこくと長瀧神社白山の　延命の水病む夫（つま）に汲む

須磨明石

瀧日千代美

見はるかす子午線の海　船がゆく　人丸山（ひとまるやま）の柿本神社

ゆくりなく忠度塚あり手を合わす　震災ののちの石塔直すとう

敦盛の青葉の笛に会いに行く　源平合戦夢うつつなり

須磨寺の終（しま）いに弘法たこ焼き屋　「来年もまた」と客は言いて

ピアノ弾く

井俣　初枝

土が好き太陽を恋い天あおぐ光は　我らを平等にする

暮れずともよしと思えるこの一と日　草木いっせい花を開きぬ

春来れば野蒜つみきてささっと　二人の昼餉万葉を食（た）ぶ

よき人に出会いピアノを弾く我の　脳梗塞は遠のきて今

酒よ

石神　堯生

今日は雨相撲見ようか黄門か　ままよ寝ようか焼酎湯で割る

祝い酒願掛け酒に遊び酒　かってに名づけて今日も独酒

徳利の燗つけさえも待ちきれず　機嫌ななめの今日は荒天

鼻歌のネタが途切れてふと止まり　リズムが狂う男の炊事

平成29年度 事業報告書

四月　六日（木）　春季日帰り研修
（京都最古の禅寺・建仁寺参拝と何度でも行きたい清水寺への旅）
参加者二七名
一〇日（月）　「文化財やまと」四二号編集委員会　原稿の進捗状況の確認
五月　九日（火）　第一回執行部会（大和庁舎三〇二会議室）
新年度への取り組み
平成二九年度事業計画・予算案について
「文化財やまと」第四二号最終編集会議
一七日（水）　第一回役員会（大和庁舎三〇一会議室）
平成二九年度への取り組みについて
二〇日（土）　平成二九年度総会、（大和生涯学習センター）
①平成二八年度会務・決算報告
②平成二九年度事業・予算の承認
③会報「文化財やまと」四二号発刊（発行部数二五〇部）
④白山開山千三百年記念講演（長滝白山神社宮司　若宮多門氏）
七月一三日（木）　第二回役員会（奉仕作業への取り組みについて）
二九日（土）　東氏館跡庭園池泉清掃・阿千葉城跡清掃（剣上地区参加）
八月　七日（金）　牧　七日祭・薪能　千葉県東庄町ご一行三五名と交流
三〇日（日）　上剣　赤保木祭
九月　八日（金）　研修部会（秋季日帰り研修について）
十九日（火）　第三回執行部会（秋季日帰り研修の計画・実施について）
三〇日（水）　第三回役員会（平成二九年度　秋季日帰り研修の計画・実施について）
一一月　九日（木）　秋季日帰り研修
（おんな城主直虎　大河ドラマ館見学の旅）
参加者二七名
一五日（水）　郡上市文化財巡視員会議（八幡総合文化センター）
一月二一日（日）　第四回役員会（事業・会計中間報告、当面の課題、引き続き懇親会）
二月　八日（木）　研修部会（平成三〇年度春季日帰り研修の計画）
一五日（金）　第五回執行部会（日帰り研修の計画・実施について）
二三日（金）　第五回役員会　（平成三〇年度春季日帰り研修について）
三月一四日（水）　郡上市文化財保護協議会（八幡総合文化センター）
一五日（木）　文化財やまと編集会議（第四三号発行について）

平成30年度 事業計画（案）

四月　五日（木）　春季日帰り研修
（徳川美術館特別展見学と南知多海鮮料理）参加者二四名
五月　一日（火）　第一回執行部会（つくしの家）
三日（木）　第一回役員会（大和庁舎三〇一会議室）
千葉サミット参加について
一八日（水）　「文化財やまと」四三号編集会議
二六日（土）　千葉常胤生誕九百年記念　第二回千葉サミット
二七日（日）　（三井ガーデンホテル千葉）大和町文化財保護協会から一六名参加
六月　八日（金）　平成三〇年度大和文化財協会総会、（大和庁舎二階）
①平成二九年度会務・決算報告
②平成三〇年度事業・予算の承認
③会報「文化財やまと」四三号発刊（発行部数二五〇部）
④記念講演「旗本二千石遠藤家」郡上八幡地域史家　高橋教雄氏
七月　三日（火）　第二回執行部会
一二日（木）　第二回役員会（奉仕作業への取り組みについて）
二八日（土）　東氏館跡庭園池泉清掃・阿千葉城跡清掃（剣上地区参加）
八月　七日（火）　七日祭・薪能
二六日（日）　上剣　赤保木祭
九月　四日（火）　研修部会（秋季日帰り研修について）
一一日（火）　第三回執行部会（秋季日帰り研修について）
二五日（火）　第三回役員会（平成三〇年度　秋季日帰り研修の計画・実施について）
一一月　初旬　秋季日帰り研修
二七日（火）　第四回執行部会
一二月　八日（土）　第四回役員会（事業・会計中間報告、当面の課題について、懇親会）
二月　七日（木）　研修部会（平成三〇年度春季日帰り研修の計画）
一四日（木）　第五回執行部会（平成三〇年度春季日帰り研修の計画）
二六日（火）　第五回役員会　（平成三〇年度春季日帰り研修、事業・会計報告）
三月一四日（木）　「文化財やまと」四四号編集会議
下旬　第三回郡上市文化財保護協議会理事会

会員名簿（順不同）

平成30年5月現在

● 顧問		
籏 勝美	(剣)	88－2031
日置敏明	(大間見)	88－2254
■ 剣		
田中和久	(理事)	88－2200
(田中康久)		88－2200
森前登志子		88－3479
小池祐二		88－4064
(小池圭子)		88－4064
田代全廣	(理事)	88－3835
(田代寿子)		88－3835
河合 尚		88－2304
日置智夫		88－2730
加藤典子		88－3687
河合利雄	(理事)	88－3520
加藤文蔵		88－2802
佐藤光一	(名誉会長)	88－3201
(佐藤八重子)		88－3201
山内 博		88－2886
(山内悦子)		88－2886
村瀬喜八		88－2128
村瀬方彦		88－2008
日置武雄		88－2303
■大間見		
大野一道	(理事)	88－2230
(大野紀子)		88－2230
青木ユリ子		88－3477
村井紀幸	(理事)	88－2323
池田充彦	(理事)	88－2796
小野江 勉		88－2725
藤代順行		88－3060
松井賢雄	(理事)	88－3991
坪井由佳子		88－3990
■万 場		
桑田守夫	(理事)	88－2514
石神堯生		88－2413
畑中真智子		88－2441
稲葉和巳		88－2503
黒岩弘己		88－2458
桑田洋一		88－2414
青地正男		88－2447
大井正明	(理事)	88－2894
井俣初枝		88－2758
筧 明代		88－2532
大井峰雄		88－2893
籏 清子	(理事)	88－4170
大中登志枝		88－3624
■徳 永		
細江幸久	(書記)	88－4157
(細江和子)		88－4157
山内孝一		88－2616
渡辺睦子	(理事)	88－2076
遠藤賢逸		88－4141
(遠藤富貴子)		88－4141
村瀬弥治郎		88－2602
山内敏子		88－2120
■神 路		
山田正代	(理事)	88－2114
臼田浄円		88－3461
羽生 清		88－2271
山田味代子		88－2844
山田敬子		88－2336
臼田金市		88－3883
(臼田路子)		88－3883
野田加奈枝		88－3460
山田幸子		88－2693
■ 牧		
齋藤武生	(会長)	88－3922
(齋藤純子)		88－3922
滝日一正		88－3064
松森幹男		88－3919
遠藤伝司	(監事)	88－3934
日置光一		88－3001
瀧日千代美		88－3059
三浦泰治	(理事)	88－9080
(三浦愛子)		88－9080
粟飯原明子		88－2362
日置人司		88－2662
田口勇治	(理事)	88－3950
遠藤高真		88－2890
野田嘉明		88－3043
金子政子		88－3426
早瀬ふみ子		88－3327
■栗 巣		
野田恵光	(理事)	88－4027
島崎増造	(監事)	88－2236
筧 政則		88－4031
増田洋子		88－4041
道家稔啓		
(道家真由)		
島崎貢一		
■古 道		
金子徳彦	(副会長)	88－3063
細川 優	(理事)	88－2861
松井清治		88－3118
遠藤賢雄		88－3983
■名皿部		
佐尾チドリ	(理事)	88－3544
有代眞一	(理事)	88－3791
■落 部		
常平 毅	(副会長)	88－3837
(常平真由美)		88－3837
本川喜代士		88－3833
(本川清子)		88－3833
柴垣 諭		88－3239
(柴垣香久子)		88－3239
小島与三		88－3814
(小島洋子)		88－3814
■ 島		
奥田昌明		88－2520
森藤雅毅	(理事)	88－2684
奥田弘親		88－2431
木島 清		88－3304
森藤龍史		88－2154
和田平八郎		88－4324
森 憲司	(会計)	88－2554
田中 篤		88－2792
山田長次		88－3648

正会員	90名
家族会員	16名
合計	106名

◆◆◆ 平成29年度 決算報告書 ◆◆◆

（収入の部）　（単位：円）

項目	決算額	摘要
前年度繰越金	2,002	平成28年度より
会員会費	196,000	正会員90名家族会員16名
	36,000	特別会員　賛助会員
助成金	81,000	郡上市より
雑収入	10,000	
合計	325,002	

（支出の部）　（単位：円）

項目	決算額	摘要
総会費	18,412	記念講演（若宮多門氏）お茶　等
会議費	5,593	執行部会 運営各部会 役員会
会議費小計	**24,005**	
会報発行費	57,240	会報「文化財やまと42号」250部
ホームページ制作費	5,466	さくらレンタルサーバー
奉仕活動費	10,076	文化財清掃奉仕作業 傷害保険
文化財保護費	8,400	七日祭・赤保木祭
研修費	108,394	春季・秋季日帰り研修補助 役員研修
記念事業積立金	50,000	
事業費小計	**239,576**	
消耗品費・事務費	5,025	用紙代・印刷代 等
通信費	7,670	はがき・切手 送料
事務局費小計	**12,695**	
負担金	20,000	市協議会費
補助費	27,200	生花　東庄町御一行と交流（七日祭）
次年度繰越金	1,526	
合計	**325,002**	

◆◆◆ 平成30年度　予算（案）◆◆◆

（収入の部）　（単位：円）

項目	予算額	摘要
前年度繰越金	1,526	平成29年度より
会員会費	196,000	正会員 90名 家族会員 16名
	36,000	特別会員　賛助会員
助成金	81,000	郡上市より
雑収入	474	
合計	315,000	

（支出の部）　（単位：円）

項目	予算額	摘要
総会費	20,000	記念講演（高橋教雄氏）
会議費	10,000	執行部会 運営各部会 役員会
会議費小計	**30,000**	
会報発行費	60,000	会報「文化財やまと43号」250部
ホームページ運営費	10,000	レンタルサーバー代
奉仕活動費	10,000	文化財清掃奉仕作業 傷害共済
文化財保護費	10,000	七日祭・赤保木祭 文化財標柱設置
研修費	100,000	春季・秋季日帰り研修補助 役員研修
記念事業積立金	30,000	
事業費小計	**220,000**	
消耗品・事務費	5,000	用紙代・印刷代 等
通信費	10,000	はがき・切手 送料
事務局費小計	**15,000**	
負担金	20,000	市協議会へ
予備費	30,000	
合計	**315,000**	

平成29年度の歳入・歳出処理について監査を行ったところ、適正に処理されていましたことを報告いたします。

平成30年5月25日

監事　遠藤伝司

編集後記

「文化財やまと四十三号お届けします。」

文化財の発見・保護は、ちょっとしたことがきっかけで、それまでの考え方を転換・前進させてくれるもののようだ。

巻頭の会長の記事に、仏壇のお磨きをしていて、偶然発見された巻物で、郡上や越前の九か村の人たちが簑と傘を身につけたものであったことがわかった。

若宮氏の講演で、長瀧神社に信長の寄進したお椀とお膳が保存されていて、信長の白山信仰の思いが伺えた。

虚空蔵菩薩の修理、保全から遠く平泉と白山との間にあった藤原氏の白山信仰、山伏をはじめ、全国の人が関わっていることがわかった。

姫神の活動は、白山文化と文化財保護について考えさせるきっかけを作り、今後も交流し続けていくことの大切さを教えてくれた。

文化財の保護、発見に努めることは将来に新しい発見を生み出す基づくりをしていることのようだ。

研修旅行記を書かれた二氏や寄稿下さった方々に感謝します。今後もご意見お聞かせ下さい。

（編集子）

「文化財やまと」第四十三号　平成三十年六月八日発行　発行者／大和町文化財保護協会　代表者／齋藤武生　印刷者／白鳥印刷